

# 武士道と「主君押し込め」

## ● 諫言こそ真の忠義

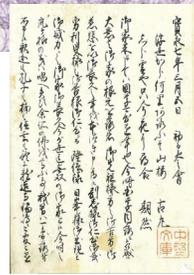
江戸時代の武士は社会を統治する身分として位置づけられ、武士にはその身分にふさわしい生き方や道徳が求められました。それが武士道です。武士道には、主君に対する忠義を土台として、尚武、剛健、信義、節操、廉恥、仁愛、礼儀、質素、などの徳目が含まれていました。

このうち武士道の中核をなす忠義については、主君の命令に絶対的に服従することが武士道であるというイメージで語られることもあります。しかし、藩の領民を苦しめる暴政を行ったり、悪しき素行にふけったりする主君も時には現れます。そんな場合、家臣である武士はどう対処すべきなのでしょう。武士なのだから間違っていることが明らかでも、主君の命令には絶対に従うべきなのでしょう。

そうではありません。武士道の教えを記した代表的な書物である『葉隠』には、主君の言動が間違いだと思われる時には、たとえ主君の怒りをかったとしても、その間違いをいさめ、主君に諫言することが真の忠義であり、真の武士のあり方であると書かれています。武士にはものごとに対する主体的な判断が求められていたのです。

## ● 「主君押し込め」のルール

では、もしそうした諫言にも耳を傾けずに暴虐の振る舞いが取まらない主君にはどう対応すべきなのでしょう。そのような場合、藩の家老や重臣の合議に基づき、家臣団の手で藩主を座敷牢に監禁する慣行がありました。これを「主君押し込め」といいます。



『葉隠』江戸時代中期（1716年後ごろ）に書かれた書物。佐賀鍋島藩士・山本常朝（1659-1719）が、藩主に仕える武士の心得を口述したもの。（佐賀県立図書館）

「主君押し込め」には、正式な作法とルールがありました。まず、藩の家老たちは表座敷で主君と対座し、しばらくは謹慎してくださいと申し上げるのです。そして主君の身柄を拘束し、大小の刀を取り上げ座敷牢に入ってもらいます。

その後、主君が十分に反省し、暴虐の政治をやめて善政に努め、家老たちに報復をしないことが約束されれば座敷牢から出して再び主君の座に返り咲いてもらいます。もし反省がないようならば隠居してもらい、主君の実子などを新しい藩主に擁立するのです。

## ● 個人を超えた「公」の利益

武士道とは、主君に対する絶対の服従を意味するものと捉えられがちですが、実際はどうしても他に手段がない場合、「主君押し込め」のような行為が認められていました。そして、実際に、「主君押し込め」が実行されたケースも記録されています。

結局、武士道における主君への忠義は、究極的には主君個人のために求められたのではなく、家臣や領民から成る共同体としての家や藩の存続のために求められたのです。その意味で、武士道には「個人」の利益よりも「公」の利益を優先する思想が含まれていました。

幕末に外国の勢力が日本に襲いかかってきたとき、武士のもっていた忠義の理念は、藩の枠を超えたより大きな「公」としての日本の存続のために献身する行動を生み出すことになるのです。